

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

「農学部国際交流 News letter」発刊によせて

農学部長 岩井 保

日本には「袖振り合うも他生の縁」ということわざがあります。見ず知らずの人同士がふとした機会に知り合いになるのも、深い縁で結ばれているからだといわれています。言葉や生活習慣が違う国で、勉学・研究を続けている皆さんの苦労は私自身の経験からよく分かります。毎日顔を合わせていてもコミュニケーションが十分でない、ちょっとした小さなことでも大きな誤解のもとになります。しかし、打ちとけて話しができれば、またとない親しい友を作

ることができます。大学の中でお互いに知り合う人がひとりでも多くなり、交流の輪が広がるのは素晴らしいことです。そのためにも皆さんにできるだけ多くの情報を提供することが重要だと思います。このたび、農学部の留学生室から発行されることになった「農学部国際交流 News letter」はそのような役割の一端を担うものであると思います。皆さんがこの印刷物を交流のための情報として活用されることを期待してやみません。

新留学生のための

..... オリエンテーションとパーティー

農学部国際交流委員会は、本年4月より新たに農学部の正規課程大学院生あるいは研修員となった外国人留学生を迎え、4月13日午後4時より小会議室に於いてオリエンテーションを行い、その後歓迎ビールパーティーを開催しました。これらはいずれも農学部として初めての試みでした。

オリエンテーションでは23名の新留学生に対し、当時の川島学部長の挨拶の後、西村国際交流委員、岡川専門教育担当教官から学部事務各掛りの役割やサービスの説明、農学部留学生室の紹介などを行い、その後、学部図書室、学生用コンピューター端末室を訪問し各係りの方から説明を受けました。

新留学生歓迎ビールパーティーは、同日午後5時から7時まで学部大会議室で催されました。

農学部からは学部長、評議員、学科・専攻主任、農学部国際交流委員および事務職から事務長、事務長補佐、各掛長の皆様に出席して頂きました。このパーティーには新留学生に加えて70名以上の外国人留学生と研究者、計120名を超える多くの方々に参加し、会はいやが上にも盛り上がりました。

パーティーは川島前学部長の歓迎挨拶、栃倉評議員の乾杯の音頭で始まり、引続き新留学生の自己紹介に移りました。20ヶ国を超える国籍の異なる参加者はビールで喉をうるおし、料理をつまみながら会の終了まで歓談、座談に興じました。



最近、農学部に在籍する外国人の数は120名を越え、その数は増加の一途をたどっています。外国人の数が増えるにつれ留学生同士での互いの面識がなくなり、他の外国人との交流の機会が減っているという声があります。日本人と外国人との交流ばかりでなく、異なった文化に属しながらも農業あるいは生物生産に関する科学に対する類似した学問的背景を共有する人々との交流は他では得られない経験となるはずで

す。この様な理由から、農学部国際交流委員会は財政上の問題を抱えながらも、農学部教授懇談会と農学部事務室からの御配慮を受けて、今回この催しを実現することができました。この国際交流の企画に賛同を得て、キリンビール(京都工場)、雪印乳業(京都工場)、ならびにサントリーからも御高配を賜りましたが、ここに報告して謝意を表したいと思います。

快適で和やかなパーティーの雰囲気を生み出すよう、御尽力下さった学部事務室と留学生の有志の皆様方、どうもありがとうございました。

畜産学科の川島教授及び宮崎助教授の御好意により畜産学科学生の見学旅行に留学生が同行することが出来ました。この見学旅行は農学部バスを利用するため空席を留学生に提供していただいたものです。所属の如何を問わず農学部在籍の全外国人にお知らせしたところ、毎回4～5名の定員に対し2～3倍の応募者があり好評でした。他学科・専攻においてもこのような機会がある時には、留学生の同行を御考慮下されれば幸いです。本号にスハイミ・オマール氏(畜産資源学 MC1, マレーシア)による見学旅行の感想記が掲載されていますので御一読下さい。

- 4月15日 神戸：全農(株) 飼料工場
- 4月21日 京都：屠殺場、肉の競り市
- 5月7日 滋賀：大中干拓地での牛の高度集約飼養
栗東の競走馬トレーニングセンター
- 6月11日 西宮：伊藤ハム(株) 工場
アサヒビール(株) 工場

桜祭りの連想

趙 広 傑 (林産工学, 中国)

日本の国花と言われる桜が満開になっている時、私は中国からやって参りました。むこうで桜にかかわる話などいろいろと聞いたことがあります。ところが、いったい、どういふわけで桜は、日本人の生活と切っても切れないほど密接な関係を持っているのかと質問されたことがありましたが、うまく答えられませんでした。と、申しますのも、その風土から、あるいはそこでの実際の生活から離れた所にいる人間にとって、日本人と桜の関係というものは、完全にわかる筈はないと思っていたからでした。

京都を訪れて間もない頃のことです。ある日友人に誘われて、下宿に近い桃山城へ花見に行きました。立派な桃山城は白い桜に囲まれ、一層きれいになったように思われました。大勢の人々は桜の木の下で、各々集団となって、それぞれに楽しんでいます。きれいな和服を着た女性たちは、歌ったり、踊ったりして、楽しそうに見えます。年寄りのグループは、カラオケにあわせて演歌を歌いながらお酒を飲んでいて、完全に陶醉しているようです。どこからかわからないが笑う声が聞こえます。私達は城に登り、その上から見下ろしますと、目の届く所隅々まで、桜に埋められた京都は、夕日に薄く染まりながら、一段と美しくなっていく様子です。花見の人達は夜遅くまでそれぞれに楽しんでいたということでした。

人間は、自然を愛すべきものなのです。ある特定の風土、特定の季節に生まれたものは、愛される筈です。すでに桜が日本民族の文化の一部になっている訳は、日本にやってきて、日本の風土と伝統を観察することによって納得できたように思われます。

日本人は桜が大好きです。中国のハルビンに住む人々が、氷雪を愛するのは、日本人と桜の関係とごく類似したことではないでしょうか。

あ！ネパールから来たのですか。とてもきれいな国でしょう。山の生活は大変でしょうね。ヒマラヤに登ったことがありますか。ネパールでは皆裸足で歩いているのですか。結核で皆大変でしょう……ほめられているのかも知れないが、日本ではだれに会ってもよくそう言われる。ネパールは山だけしかない国でもなければ、誰でも8,000m級の山に簡単に登れる訳でもない、と答えたい気持ちが時には起こるほどである。時にはネパールのことを多少知っている人と話しをしている中に、ネパールは確かアジアにあるのですよネ、と付け加え、えー、カトマンズにあるのですよ、とある人は断言し、北部インドだよ、と訂正する人もある。時にはおジャカ様はインドに生まれたのですよ、と教わることもある。

多くの留学生は似たような経験をしているようだ。ある時、寛いでいるとなぜかこの様な話になった。そこで、中国のL君は「そうなんだ、日本人はいつでもおなじことを言うし、それ以外のことは知らない、知ろうともしない」と、つぶやいた。フィリピンのJ君とかタイのPさんは、日本人はテレビ等で報道される情報に左右され、その他のことは考えることもできないのだと、不満を表した。別の機会で、アメリカのGさん、カナダのJさん、フランスのMさん、ブラジルのEさんもそれぞれ自分の国に関する日本人の片寄った知識について、口をそろえて「日本人は他国のことについて良く分かっていない」と言った。

確かに、日本ではマスメディアが発達して、イヤでも情報が入ってくる。このような一方的な情報だけでは片寄った知識しか累積されないと思う。だが、一般的に、今の日本では関心さえあれば手に入らない情報はまずない。だから、より多くの正確な情報を話の土台にして対話を進めることは可能だと想像できる。にもかかわらず、一昔前の教科書の知識や中途半端な情報だけで対話を求められることが、よく分からない。

それどころか、自分が持っている情報を全部出して話題を作り、対話を求め、付き合おうとしているにもかかわらず、まったく無視されたと感じる日本人がいる場合もあろう。カッコなヤツだ、日本に対して何をしに来ているの、まったく分からない、と留学生に注文を付ける日本人も多いと思われる。

お互いに理解し合うためには、話し合うことが大事だ。その話の話題として、お互いに共通するものがないとうまく会話は進まないであろう。自分が持っている情報を全部出して話題を作ろうとする日本人に少なくとも悪意はないと思われる。対話を求めるその個々人の努力を評価すべきであろう。だが、元の情報が共通点を欠くとすれば、互いの理解に隔たりがあったとしても、仕方がなかろう。

日本では、教育制度、その他の社会制度、情報ネットワークは非常に発達し、かつしっかりしている。ゆえに、皆が同じ一般社会教育を受けることができる。そして、あらゆる情報がより早く、より広く知れ渡る。だから「日本人は

誰もかれも同じことを言う」ということになるのである。土台が同じであるがゆえに、日本人は、皆同じように考えがちであると言えよう。日本人同士は数多くの共通点を持っている以上、同じような行動を取り、同じような感覚でお互いのことを理解し合うと思われる。その感覚に合わない、たとえ日本人であっても変わった人であり、カッコなヤツなのである。その共通点が極めて少ない留学生は、その感覚に合わないことが起きてしまう。外国人だから日本の事・文化・風習など分かるはずがないと思われることもあろう。だから、日本人は留学生のことをカッコなヤツだと、時には口にするのだろう。

しかし、留学生が母国を離れ、来日しているのは、日本社会に親しみ、日本で何かを学ぼうとしているためなのである。日本と自分との間に共通点を1つでも作り、それを1つでも増やそうとし、日本人を理解し、分かろうと努力していると思われる。お互いの共通認識を深め、1人でも多くの日本人と友情を結びたがっている。その出会いを大切に、いつまでも思い出せるような友情を宝として、それを持って帰国したがつているのである。だから、留学生たちは、日本人に自分たちのことにもっと関心を持ってもらい、国を前提に(限定された知識で)というよりも、もっと基本的な所で認識を深め、お互いを認め合い、共通する点を土台にして出発したいと言っているのである。腹を割って話し合いたがつているのである。自分の波長に合わないものは「分からない」と片付けるのではなく、もっと心を開いて零にもどり、零から始めてはどうだろうか。

水無月、ある晴天の日
(s-286号室にて)

留学生室ニュース

留学生に対する基礎的・共通的な授業

留学生室では、留学生が本学部、研究科の環境に速やかに適応し、より充実した専門教育を享受しうるために新しい授業の開講を検討しています。この授業は、(1)専門課程の留学生全体に対して基礎的・共通的なものであること、(2)留学生の日本語能力の状況に即して、必要に応じて外国語で行なわれることが望まれます。

留学生に対するこのような授業の開講に関して簡単なアンケート調査を行ない25名から回答がよせられました。内18名は本学入学以前に日本語を習っておりますが、回答者全員が日本語の語学力不足を感じており、英語または英語と日本語二ヶ国語による授業を希望しております。開講が望まれる授業は、(1)専門学術用語の解説を中心とする語学力向上のための授業(17名)、(2)日本農業の今日、および農学各分野の研究動向についての概説(14名)、(3)日本農業展開についての概説(11名)となります。その他、経済学、生物学等の基礎科目の学力補強のための授業も望まれています。

特に(2)等の農業・農学全分野に係わる授業は留学生室2名の教官ではカバーしきれませんので、全学科・専攻の教官の方々のご意見をお寄せ頂きたいと思っております。

My revisit to Kyoto..... a historic city of Japan

Tasnee Attanandana
(Visiting Scholar at CSEAS, Thailand)

It was nine years ago when I came to Kyoto University as a non-regular doctoral degree candidate in Soil Science. At that time, I was much impressed with the Japanese people and the old traditional city. Good discipline of people was my first impression. The prosperity of the country, the modernization of living, and the advanced technology of research made me curious to know more about Japanese people.

As a matter of fact, Japanese society is a group of hard working people. They are taught and trained so that they can believe the benefits of the society is more important than the individual's. You will be surprised to see that when ten working people unite, the output is not ten but hundred. This is one of the most important reasons why Japan became a leading country in Asia and comparable in many aspects to the western countries. The only thing that I did not enjoy and made me frustrated was the language problem.

At present, I am in Kyoto as a visiting research scholar at the Center for Southeast Asian Studies for 6 months. Although my Japanese is not much improved, I feel more enjoyable. The unity and hard work of the Japanese society are still obvious. However, the young generation of Japanese people have become more relaxed. The general atmosphere of living is more competitive.

The old city is still attractive to tourists and the traditional events are maintained.

Study Trips by The Dept. of Animal Science

Ahmad Suhaimi Omar
(Division of Tropical Agriculture, Malaysia)

Visiting places and people of academic interest in Japan is a unique experience. Not everybody is granted permission to visit some of the places on their own, not to mention the lengthy briefings and guided tours inside those places. I was very fortunate indeed to be able to attend the outings and to have briefings translated by Associate Professor Miyazaki.

The first visit on April 15th, 1987 was to the feedmill of Zen-Noh, a trading firm of the farmer's association, in Kobe. The journey took slightly more than one hour, during which I was able to discuss about our countries with my new-found friend from Thailand. I learned a lot more about Thailand during that one hour than I did during my one week visit few years ago.

We were briefed not only on the feedmill but also on the animal feed situation in Japan, and shown the samples and also the complex. The whole industrial area was very

well planned. The feedmill is strategically situated, with its own wharf and pipelines from other grain complexes supplying their by-products for its use.

At lunch time at the port island, I was introduced not only to the whole undergraduate class of the Department but also to some very kind students who offered and promised to offer me help in whatever way they can.

The second trip, on April 21st, was to a slaughterhouse and carcass auction market in Kyoto. In his briefing a veterinarian not only mentioned about the activities of the slaughterhouse but also about the meat eating habits of the Japanese! The slaughterhouse handles both cattle and pigs, on different lines, side by side. I also saw few calves at the end of the live-line and was told that there is a special requirement for their meat. The observation tower enabled us to see the whole operation in the abattoir. I was given a privilege to see the real operation at where they were!

The carcass auction market started later. The newly renovated auction room is equipped with push button facilities. The Japanese give special preference to marbled meat and pay more for marbled animals, being contrary to what we will find in other parts of the world.

Please keep your lens cap in its place or ask permission to photograph in the slaughterhouse in order to make visit to the abattoir pleasant.

The next trip was very interesting, which took us to

two contrasting places; the horse training center and the reclaimed area where farmers live below the water level of Biwa-ko. Ritto Horse Training Center is not far from Kyodai, about 30 minutes bus ride. There are only two of such centers in Japan. Video briefing took us around the center from the early hours in the morning to the race courses around the country. The big complex provides the employees with accommodation. The horse clinic is equipped with big surgical tables and a powerful X-ray machine. The special observation point allows one to see the entire course.

We visited Dainaka fodder area in Shiga prefecture the same day, May 7th. The briefing at the Co-operative's office allowed some students really rest! By visiting those farmers we have gained the first hand experience of farmers life in Japan. This reclaimed land is below the water level of Lake Biwa and equally allocated to those who worked for the reclamation. In the intensive grassland they use minimal manpower and a lot of machineries. I was impressed with the efficient utilization of the drying barns for both the plant harvests as well as animal wastes.

Do you notice how much Japanese drink beer? The study trip in June will take you to a beer factory. Would you like to join it next year? Please contact Foreign Student Advisor's Office.



VISIT FOREIGN STUDENT ADVISOR'S OFFICE

RYUGAKUSEI SITSU

Foreign Student Advisor's Office is maintained by two lecturers; Lect. Nagao Okagawa and Lect. Akinobu Kawai. Main aims of this establishment are; (i) to improve the academic circumstances for foreign students and scholars, (ii) to assist and guide foreign students in their research activities as well as in personal matters, (iii) to give introductory lectures for foreign students. We are glad if you drop in at our office. (Extension phone No. 6366)

ATTEND DTA ENGLISH SEMINAR

DTA English seminar is held once a month. Four lectures were given in this term;

- (1) Mr. Sai Aung Hsan, Dept. of Botany, Mandalay Univ., Burma, "Shifting Cultivation in Shan State, Burma"
- (2) Dr. Tasnee Attanandana, Dept. of Soils, Kasetsart Univ., Thailand. "Effect of Lime on Phosphate Availability and Sulfate Reduction in an Acid Sulfate Soil"
- (3) Dr. Sompong Orapin, Dept. of Economic & Business Administration, Kasetsart Univ., Thailand. "A Comparative Study of Structure of Agricultural Production between Japan and Thailand"
- (4) Dr. Aran Patanotai, Dept. of Plant Science, Khon Kaen Univ., Thailand. "Framing Systems Research in Thailand"

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話 (075)751-2111 内線 6366
印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話 (075)441-3155~8